

感謝の一粒

宇和島市立津島中学校 2年 田村 康士郎

僕のパワーの源は、祖父の作るお米だ。大切な試合の朝は必ず、わざと大きく握ってもらった塩にぎりを食べる。大きなおにぎりを頬張ると、腹の底から力が湧いてくる気がする。それは、単におにぎりに栄養があるからではなく、お米を育てた祖父の思いや一生懸命に握ってくれた母の姿を感じられるからだと思う。

幼い頃、正直あんまりお米が好きではなかった。お米だけでなく、野菜や果物にも嫌いなものが多く、母や祖父を大いに困らせた。嫌いなものが食卓に並ぶと、食事に集中できず、途中で席をたっしてしまふこともあった。そんなある日、とうとう父の雷が落ちた。「ごはん一杯分のお米を作るのに、どれだけの時間が掛かって、どれだけの人が苦労しているのか。」と父は言った。僕のお茶碗にはいつもごはんが一口分か二口分

残っていたり、あるいはごはん粒がべたべたとくっついていたりしたままだった。食べ物のことであれほどひどく叱られたことはなかった。父はそれ以上、何も言わなかった。その年の夏休み、僕は初めて祖父の稲刈りを手伝うことになった。機械があるとはいえ、田んぼの端の方にある稲を刈るのは手作業だ。また、何度も田んぼと倉庫を往復しなければならず、本当に大変な作業だと感じた。ふとある日の茶碗に残ったごはん粒を思い出した。僕が粗末にしてしまった一口には、たくさんの人たちの苦勞が込められている。小さな稲から始まり、刈り入れられるその時まで、たくさんの方が時間を費やしている。好きや嫌いと、いう自分勝手な考えの前に、僕たちの目の前に食べ物がないと思っただけのこと、感謝しなければならぬ。それからというもの、嫌いなものを克服するのは時間がかかったが、ありがたくいただくようにしている。そ

して、ごはん粒は一粒も残さないと心に誓っている。
柔道を習い始めると、体を大きくするためにもっとごはんを食べるようになった。当然ながら、我が家の米の消費量は年々増えていった。体重を増やすためにプロテインや菓子などの間食を取り入れたが、やはりお米は他の食べ物とは違う気がした。それは、自分が食べているお米が誰によつてどのように作られているという背景をよく知っているからだ。ろう。祖父はよく「じいちゃんのお米をたくさん食べて大きくなれよ。」と言ってくれます。ごはんを食べていると、祖父の顔が浮かんで、「よっしゃ、食うぞ。」という気持ちになるのだ。たくさんごはんを食べて力を付けて結果を出し、祖父を喜ばせたい。そのように素直に思えるからこそ、お米に込められたパワーを感じられずにはいられないのだ。自分の食べているものがどのようなように作られているかを知っていることは、食べ物への向

き合い方が変わってくる。今日では、あらゆる食材を手軽に手に入れることができる。一つ一つがどのように作られているのか知らない人も多いことだろう。祖父が子供の頃は、農繁期に家の手伝いをする子供も多くいたそうだ。僕自身も稲刈りの手伝いをしたことでお米を食べることのありがたさに気付くことができた。だからこそ、妹や友人にも同じ体験をしてもらいたいと思った。今年の夏も稲刈りの時期がやってきた。手作業の役目は、僕と妹の仕事だ。大変な作業の中で、妹にも多くのことを学んでほしいと思う。